

2023年3月19日大齋節第4主日説教

サムエル記上 16章 1-13節

エフェソの信徒への手紙 5章 8-14節

ヨハネによる福音書 9章 1-13節、《14-27》, 28-38節

バラの周りのパンジーと小さな星の形の花がきれいに咲いています。入り口付近の桜も咲き始めました。もうすっかり春になったように感じましたら、また急に寒くなりました。皆さまどうぞ体調にお気を付けてください。大齋節は第4主日となり、大齋講話も本格的に楽しみになりました。

さて、本日の福音書は、生まれつき目が不自由であった人を、イエス様が癒す物語です。非常に長い物語ですが、結論は、生まれつき目が不自由であった人が、イエス様に会い、信仰の世界を歩み始めたということです。

この物語の発端は、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」（ヨハネ9:2）という弟子たちの質問です。この質問の注目すべき点は、「誰が罪を犯したからか？」という視点があることです。背景に、生まれつきの不自由さ・不幸がある理由とは、両親・先祖が罪を犯した結果だから、という説明があったからです。

この説明には律法、ことに申命記5章9～10節にある「わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」の解釈が関係しています。この箇所の大切さは、後半部分にある主なる神様の愛の深さですが、前半部分の「父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う」が、説明に用いられていたのです。そのような説明は、罪を犯さないための教えであったのだと思いますが、今、不自由さで苦しんでいる人の救いにはなりません。

そのような背景がある中で、イエス様は、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」と宣言します（ヨハネ9:2）。これは、生まれつきの不自由さや病によって、苦しむ人がそのままにされる世界を、主なる神様が望んではおられないことを示します。イエス様がそう宣言することができるのは、「わたしは、世にいる間、世の光である」（ヨハネ9:5）であるからです。そしてイエス様はその人の目を癒すのですが、この物語の重要なところは、奇跡の発生で終わらない点です。社会が、癒された人も、イエス様も受け入れないからです。

目を癒された人は、まず周囲の人から『その人だ』と言う者もいれば、『いや違う。似ているだけだ』と言う者もいた」と認めてもらえませんでした。本人が、「わたしがそうなのです」と答えるのが、信じてもらえないのです。彼らは同じを人見ているのですが、同じ人に思えないのです。ファリサイ派の人たちは、不自由な人の目が癒されたことを詳しく聞くのですが、その癒しを誰が行ったか、また安息日に行われたかに注目し理解しようとしています。そして、結論として「それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見える

ようになったということを感じなかった」(ヨハネ 9:18) のでした。最後に、目が癒されたことについての説明は、その人の両親に及びます。しかし、両親も、「もう大人ですから、本人にお聞きください」(ヨハネ 9:23) とその人を見捨ててしまうのです。生まれつき目が不自由であった人は、たまたまイエス様と出会い、目を癒されました。彼自身には大きな変化があったのですが、社会が全く変わっていないために、彼は、社会から追放されるのでした。

しかし、福音書の物語は、それでも終わりではありません。社会から追放され、たった一人にされた彼に、イエス様がもう一度出会うからです。出会うというよりも、彼のことを聞いてイエス様が彼を見つけ出すのです。つまり、イエス様の方から会いにきてくださるのです。そして、イエス様は、「あなたは人の子を信じるか」と聞きます。「人の子」という言葉は、いろいろな意味があります。それ故に、彼は、「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが」と問います。するとイエス様は、「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」と答えます。彼の答えは、「主よ、信じます」の一つでした。そして行動も一つでした。「ひざまづくこと」すなわち、礼拝することでした(ヨハネ 9:35-39)。

「聖餐式聖書日課」は、『聖書』の「ひざまづく」と、「ひざまずいた」に変えて物語を締めくくっていますが、それも終わりではありません。最後は、イエス様の「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」(ヨハネ 3:39) という言葉で終わっています。この言葉は、物語を超えて、読者に語り掛けています。そして、有名な3章17節の「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」と矛盾しているようにも思えますが、そうではありません。ヨハネ福音書の世界観において、この世界は、闇でしかありません。しかし、イエス様が登場した時、この世に光が輝いたのです。だから、3章はその光から世界を見た人を裁くことはないと言っているのです。そして、光を光として認めず、闇の中にとどまろうとする人はそうではない。本日の箇所はそのことを語っているのです。

本日の物語が、実際のファリサイ派あるいはユダヤ人の実像を示しているかというそうではありません。また関心はそこにはありません。この長い物語が示している事柄は、イエス様は「まことの光」であり、いつの時代であっても、そして、この世界がどんなに闇だと思えても、その光は輝き続けている言うことです。そしてその光を信じる人は、この闇の中にいながらも、光の中にある、神様の恵みと守りの中にあるということです。そのことを悟り歩み続けることが、信仰の世界を生きることです。

教会は、この信仰の世界を少しでも社会で具体化することが大切です。20世紀に起こった、バリアフリーという概念もそのひとつです。しかし、最も大切なことは、わたしたち一人ひとりが、イエス様を光と信じて歩むことです。それが明確に示され、いつも確認できるような礼拝と交わりを続けたいと思います。